

## ◇ 国 語

国 2-1～国 2-17 まで 17 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

北イタリアの海岸を旅していたある日、とある小さな村落の共同墓地にめぐり合った。海に面して小高い丘の上にある古色蒼然たる墓地である。墓石には墓碑銘があり、その上に小さな玉子形のガラスに封印されたように、マイソウマイソウされていると思われ、人のシヨウゾウ写真がはめ込まれていた。写真のあるものは銀化してしまつて、ある角度からみるとうつつすらと面影がうかがわれる。また、あるものは水がしみ込んで顔が溶けてしまい、かろうじて人の顔だとわかるのだが、その分かえって強い印象が残る。墓碑銘によると、ほとんどが一九世紀に生まれて二〇世紀初頭に死んだ人達であるらしい。年とつて死んだ人だけでなく、若くして死んだ人や、かわいい盛りの子供も多い。私はこれらのシヨウゾウ写真を見ながら奇妙な錯覚に陥つてしまつた。もともこの墓石にはガラス玉しかはめ込まれていなかったのだ。長い時間をかけて徐々に、死んでしまつた人の霊がこのガラス玉の中に銀色の像として浮かび上がりつつあるのだと。見ず知らずの通りがかりの旅人である私に向つて、それは何かを語りかけてくるように思えた。私は三日間ほど滞在して毎日その墓を見に行った。心なしか前の日よりも像は濃くなつていくように思えた。

写真装置というの是一对の雄型と雌型からなる型取り装置でもある。生きた生身の人間の顔から直接イガタを作るのだ。そのイガタからまるで生写しの仮面を作ることができる。しかし生写しでいられるのはほんのわずかの間である。仮面はしだいに生きた面を裏切るようになる。仮面は年を取らないのに、生きた面はしだいにドリアン・グレイのシヨウゾウのように老いくずれてゆく、そして遂に死に至り仮面だけが残る。蟬せみが長い地中生活に見切りをつけるときにぬけがらを残して飛翔の自由へと飛び立つように、人間も魂のぬけがらのような写真を残して、なにかはてしのない自由に向つて飛び立つていく、それが死だ。そして古来より日本ではこれを成仏すると言ひならわしてきた。

私が初めて仮面に出会つたのは高校生の頃だつた。東京の国立博物館にツタンカーメン展を見に行つた時のことだ。長蛇の列に並んでやつとあの仮面の前に着いた。黄金に燦然と輝き王の威厳をまわりに放射していた。若くして死んだ王の面影を写した

ものだと、いうその仮面は、濃いアイシャドウに限取られ毒蛇の玉冠を付けて生彩を放っていた。カタログには麻の包帯を解かれた王のミイラの写真が載っていた。写真は常に生々とした真実を写すものだと思っていた私は、その写真を見てショックを受けた。そこには死んでしまった人の生前の姿ではなく、死そのものの生々しい姿が写されていた。三三〇〇年にも亘る死が。そして死んでしまった人の生前の姿はその黄金の仮面の上に残されていたのだ。私はその仮面と写真の間の時間のクレバスの底に落込んで行くような、えもいわれぬセンチリツをおぼえた。カタログには発掘の顛末が書かれていた。第一発見者の一人でもあり発掘の資金を全面的に提供したカーナーボン卿は、ミイラ発見の数カ月後カイロで蚊に刺されたあとが化膿して急死する。黄熱病でもマラリアでもない不思議な死だったと書かれていた。その後数年にわたって発掘関係者は次々と不審な死をとげたと言われている。私は業因という仏教用語の意味をその時はじめて知った。

能は単純な構成要素から成り立っている。旅の僧、橋、そして ア である。旅の僧は橋を渡ることによってこの世の時間のソクバクから解放されて、ある種のトワイライトゾーンへと導かれる。そこで土地の昔話に思いをはせていると、どこからともなく人が現れその昔話をくわしく語り聞かせる。不思議に思つて名をたずねると、意味ありげなことを言い残して消えてしまう。夜もふけて僧が眠りにつくとその夢にさきほどの者が現れ、実は自分こそがその悲劇の物語の主人公の亡霊であることを告げ、この世に残した未練の為に成仏できずに苦しんでいると話し、舞いはじめる。僧が祈りをささげらうちに夜は明け、ゆき、いつしか亡霊も消えていく。これは一五世紀に世阿弥という天才的な劇作家が創案した演劇形式である。能の物語に登場する主人公はみな歴史上の有名人で、源氏物語や平家物語、伊勢物語などの登場人物である。いわば日本人が全体で共有しているような記憶の古層だ。この記憶が夢幻能という形式で反復されることによつて共同幻想の劇的空間が生まれる。ここではいく種類もの時間帯が流れている。まず観客が舞台を見つめている時間、僧が舞台上で旅をしている中世の時間、そしてその時間よりさらに数百年遡る亡霊の昔話りの時間。この三種類の時間が同一空間の中で同時進行していく。

能面は同一空間内の異時間を自由に行き来する為の装置である。能は前半と後半に分かれて演じられる。前半は主人公が土地の者となつて化身として面を付け登場する。年老いた漁師の面であつたり若い里の女の面であつたりする。後半になり、その化

身の霊が生前の姿の面を付けて再び登場する。ここでは霊そのものも霊が生きていた時の化身なのであるから二重の仮身化が行われていると言つてもよい。霊は戦いに敗れて死んだ武将であつたり、遂げられなかった恋情を胸にいだいて狂い、鬼になつてしまった女だつたりする。ここで老人から若武者へ、若い女から鬼へと舞台上で時間が一瞬にして轉換しドラマは頂点に達する。

能の主役（シテと呼ばれる）が橋がかりに登場する前には鏡の間と呼ばれる部屋に在る。この空間は単なる楽屋ではなく神聖な儀式の空間と考えられている。演者が面を付けることによつて演じようとする人物の霊が鏡と面を通じてシテに乗り移る。その為の空間なのである。逆にいえば死者の霊が仮面を通じてシテのこの世の仮の身体を動かしめるのである。

世阿弥が残した花伝書というテキストによると、能の起源を古代神話のアマテラスという太陽神が、天の岩戸にかくれた時にアメノウズメの命が舞を舞つた古事が起源であると記されている。古代ギリシヤにおいても、イによる悲劇が酒神デオニウシアの祭りで捧げられていたと言われる。しかし千年以上の中絶で当時の様子をうかがい知ることはむずかしい。日本では文字の出現以前の、語り部といわれる記憶保持を職業とする人々によつて語り継がれた古代神話から、中世の世阿弥による仮面劇への洗練をへて、今日に至るまでとぎれることなく伝えられてきた。これは奇蹟とも言えよう。

これは今になつて思うことなのだが、カーナーボン卿の霊は成仏したのだろうか、もちろんキリスト教での選択肢は二元論的天国か地獄である。しかしこの場合にはなにかキリスト教成立以前の、人類に共通するシャーマニズムやアニミズムのウが呼び戻されるような気がする。それは彼が呪いによつて殺されたと思われているからかも知れない。ツタンカーメンの霊は包帯を解かれながら能のシテのように、夢ばし覚まし給ふなよ、夢ばし覚まし給ふなよ、とカーナーボン卿に向つて訴えかけていたのにちがいない。

（杉本博司『苔のむすまで』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A マイソウ

- ① マイカイ楽しみにしている
- ③ グマイな政策と批判する
- ⑤ マイキョにいとまがない

② シマイ都市の契約

④ マイボツした村落

1

B ショウソウ

- ① 国民統合のショウウチヨウ
- ③ フショウの弟子
- ⑤ 会のショウガイ担当

② 首尾ショウオウする

④ 袖振り合うもタショウの縁

2

C イガタ

- ① 弓矢をイ
- ③ 鐘をイ
- ⑤ 猫がイ

② 豆をイ

④ 報告がイ

3

D センリツ

- ① 結果を見てリツゼンとした
- ③ 基金のセツリツ
- ⑤ 曲の主センリツ

② 宗教のカイリツを守る

④ 値引きリツ

4

E ソクバク

- ① バクゼンとした恐怖感
- ③ 人氣がバクハツする
- ⑤ 自縄ジバク

- ② バクリョウ長の人事
- ④ セキバクとした風景

5

問二 空欄 ア・イ・ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア ①時間 ②悲劇 ③夢 ④祈り 6

イ ①死者の霊 ②太陽神 ③仮面劇 ④語り部 7

ウ ①業因 ②夢幻 ③記憶の古層 ④死者の霊 8

問三 傍線部（一）「私はこれらのシヨウゾウ写真を見ながら奇妙な錯覚に陥ってしまった」とあるが、筆者の「錯覚」の内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

9

- ①もともと小さな玉子形のガラスに人の顔がはめ込まれていたということ。
- ②長い時間をかけて死んだ人の面影がガラス玉の中に浮びあがったということ。
- ③見ず知らずの通りがかりの旅人に何かを語りかけてくるということ。
- ④毎日墓参するうちに像の姿がしだいに濃くなっているように思えたこと。

問四 傍線部(二)「写真装置というのは一對の雄型と雌型からなる型取り装置でもある」とあるが、本文での「写真」の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

10

- ① 生きた人間の顔から写し取った生写しの仮面
- ② しだいに衰えて人間の生きた面を裏切るようになるもの
- ③ しだいに老いくずれてゆく人間の姿を写し取ったもの
- ④ はてしのない自由に向って飛び立っていく魂のぬけがら

問五 傍線部(三)「そこには死んでしまった人の生前の姿ではなく、死そのものの生々しい姿が写されていた」とあるが、どういうことか、説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

- ① 黄金に燦然と輝く王の仮面は、若くして死んだ王の面影を写したものだということ。
- ② 三三〇〇年もの間横たわり続けた王の姿が、黄金の仮面の上に刻み付けられていたということ。
- ③ カタログに写された王の姿は、麻の包帯を解かれた死者そのものの姿だったということ。
- ④ 黄金の仮面と写真との間に流れた時間は、恐ろしいほどの威厳を持った死そのものだということ。

問六 傍線部(四)「ここではいく種類もの時間帯が流れている」とあるがどのような時間か、本文の内容と異なるものを、次の①～④の中から一つ選ぶ。

12

- ① 一五世紀の劇作家である世阿弥が見詰めている舞台上の時間
- ② 源氏物語や平家物語、伊勢物語などの登場人物による昔語りの時間
- ③ 夢幻能の形式で反復されてゆく舞台を見つめている観客の時間
- ④ 旅の僧が橋を渡って訪れる舞台上の中世の時間

問七 傍線部(五)「二重の仮身化が行われている」とあるが、何と何の「二重」なのか、説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選ぶ。

13

- ① 前半と後半
- ② 土地の者の面と霊の面
- ③ 霊の生前の姿と霊そのものの姿
- ④ 土地の者の姿と霊そのものの姿



問八 傍線部(六)「逆にいえば死者の霊が仮面を通じてシテのこの世の仮の身体を動かしめるのである」とあるが、「逆にいえば」とはどういうことか、説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ①シテが死者の霊を演ずるのではなく、死者の霊がシテを動かすのだということ。
- ②面を付けることで霊が憑依するのではなく、死者が自ら面を付けているのだということ。
- ③面を付けて鏡を見ることよりも、鏡を通じて霊に見られることが重要だということ。
- ④鏡の間は単なる楽屋ではなく、儀式によって死者の霊が現れる神聖な場だということ。

問九 本文の内容と異なるものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

15

16

- ①筆者は北イタリアの共同墓地において、一世紀も昔の死者の写真に強い印象を受けた。
- ②筆者は写真装置は一对の雄型と雌型からなる型取り装置だとしてその原理を述べている。
- ③筆者はツタンカーメンのミイラの写真から写真は生々とした真実を写すものだという衝撃を受けた。
- ④能面は同一の舞台に設えられた異時間を自由に行き来する為の装置だと筆者は言う。
- ⑤花伝書によれば能は古代神話の太陽神の古事を起源とし、現代まで伝えられてきた。
- ⑥キリスト教の二元論では天国か地獄か神の審判を受けるので、成仏という概念とはなじまないと筆者は言う。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

数学の才能は偏在する。

いかなる才能も万民に平等に与えられているわけではなくて、不公平はどの分野にもつきまとうけれども、数学の場合はその偏りかたがはなほだしい。たぶん、人類全体の数学の能力というのは、いつの時代にも一定しているのだ。それが、他の分野ならばもう少し平均にばらまかれるのに、数学にかぎっては一部の天才に極端に集中する。本当の天才になると、凡人（というのは二流の数学者のこと、それでも一般人から見れば十分に神様）が迷路の中でうろろしている時に、ちようどその迷路を上から見ると、全体を見透せるのだろう。

文学を目指す若者は二十歳前後に達すると、ああ自分はアルチュール・ランボーでもレイモン・ラディゲでもなかったと気付いて、延々と晩成の道を目指すことになる。おなじように、理科の方で野心を持つものは、二十歳前後になると、ああ自分はアーベルでもエヴァリスト・ガロアでもなかったと思う。天才でない以上は地道な努力で世を渡ってゆくしかないと思えるのだ。

では、本当の話、天才というのはどのくらいすごいのか。数学の話と聞いただけで拒否反応をおこす人がいるから説明する方も楽ではないが、普通程度の数学の達人は、AはBではないかとまず閃き、その次にその証明を考える。命題が最初に出てきて、それを証明するという形で研究を進める。ところが、本当の天才になると、もう証明などはまだるっこしくてやっていられない。頭の中に湧いてくるアイデアを書いておくだけで精一杯、証明などということは二流の数学者にまかせてしまう。

エヴァリスト・ガロアが子供の頃、学校では数学の時間がもつとも退屈だったという話がある。彼の目から見れば単純きわまる二次関数の解の公式などに教師は延々と時間をかける。彼が指名されて口にした答えに対して、凡庸なる教師は「それは正解だが、数学では答えよりも過程が大事なのだ。その解が正しいことを証明してみたまえ、ガロア君」ともったいぶって問いかけた。ガロアは

「それは自明ではないでしょうか」と答えた。教師ならびに普通の生徒にとつては二十のステップを踏んで証明すべき過程をガロアの頭は一瞬にして走りぬけている。だから本当に自明としか思えないのだ。

言ってみれば、ニワトリの間に一羽だけ偉大なオオミズナギドリがまぎれこんだようなものだ。遠いオーストラリアから渡ってきたのだとか、太平洋というの<sup>④</sup>は十日の間ずっと飛んでいても終わらないほどの大きな海なのだと話しても、ニワトリには何一つわからない。海という概念さえニワトリの小さな頭では理解できない。そして、たぶん、ニワトリは自分たちに理解できないことを言うオオミズナギドリをいじめるのだろう。

ガロアは一八三二年に二十歳で死んでいる。病気とか事故ならばまだ納得できるが、彼の死因はみじめで馬鹿げたものだった。つまらぬ女を巡る決闘沙汰で殺されたのだ。生命を賭けるほどの大事な恋だったわけではなく、単なる時代の野蛮な習慣から、半分は意地で決闘の申し込みを受けて立った。その前夜、たぶん翌朝は死ぬだろうということを知って、天才ガロアは自分の頭の中にある数学思想を必死で紙に書いた。今日群論と呼ばれる広大な分野の基礎。きちんと整理して論文にする時間などなかったから、要点だけをメモのように記していった。友人あてのシヨカン<sup>↑</sup>として書かれたそのメモの内容が公刊され、学界がその価値を知ったのは数十年後のことである。

ガロアほどロマンチックではないかもしれないが、インドの数学者スリニヴァサ・ラマヌジャンの天才ぶりもすごい。この人は今から百年ほど前にマドラス州で生まれて、一九二〇年に三十三歳で没している。二十五歳の時にインドからイギリスの数学者にあてて自己紹介のために書いた手紙には、自分が発見した定理が百以上も書いてあったという。これを受け取ったハーデーという教授が驚いて、すぐにイギリスに招聘<sup>しょうへい</sup>し、それから彼はケンブリッジで研究をする身分になった。

彼の天才ぶりを（凡人にもわかるように）示すエピソードはいくつもある。彼は病弱な方だったのだが、たまたま入院している時にハーデー教授が見舞いに行った。その時に乗ったタクシの番号が一七二九だったことを教授は病室のラマヌジャンに言って、別に面白い数字でもないがと言ひ添えた。すると、ベッドの上のラマヌジャンは、「いや、それはなかなか面白い数字ですよ。二つの

三乗数の和としての表し方が二通りある最小の数ですから」と即座に答えたという。教授が紙と鉛筆で計算をしてみると、たしかに  
一七二九は十二の三乗（つまり一七二八）と一の三乗（つまり一）の和であり、また一〇の三乗（一〇〇〇）と九の三乗（七二九）  
の和でもあった。ざっとこんな具合だ。

この人の『ノート』にも証明はほとんどない。これをきちんと整理して注釈をつける作業は六十年前に始められて、今、ようやく  
終わりに近づいているという。

先日、 $\pi$ の値を二億桁以上算出するという世界記録の樹立が新聞で伝えられた。東大の田中康正助教授が高速度のコンピューター  
を使って達成したもので、これはなかなかのことであるらしい。電話帳一ページにはおよそ二万桁の数字が印刷できる。だから、今  
回わかった $\pi$ を記すには千ページの電話帳が十冊必要なことになる。

実用という点からいえば、これはほとんど意味のない数字の羅列だ。物理学や工学の分野で十桁以上の精度が必要になることはな  
い（念のために申し添えれば、一億分の一の精度というのはたったの九桁だ）。それでも、旧来の計算方法とコンピューターでは何十  
年もかかったはずだという。数時間で二億桁まで行けたというのは、それ自体で成果なのだ。

昔は手で計算するほかなかったから、桁数を上げるのはヨウイではなかった。ルドルフ・ヴァン・ケーレンという十六、七世紀の  
オランダ人は生涯のほとんどを $\pi$ の計算に費やして、最終的には三五桁まで出した。彼はこの成果を自分の墓石に刻ませたという。  
ある意味では明快な一生だったと思う。十九世紀イギリスのシャンクスのように、七〇七桁までやって悠々と死んだまではないが、  
後になって彼の計算は五二八桁以降が間違いであることがわかったという。知らぬが仏の（死んでいるのだから、本当に仏）滑稽な  
悲劇もある。

さて、今回の二億桁。一万ページの電話帳を読む者がいるのかと思うが、いずれ丁寧な検証が行われるだろう。二億個の数字の並  
びかたは本当にでたらめなのか、というあたりに興味がある。本当のでたらめというのは必ずかしいことで、〇から九までの数字が

平等に出てこなくてはならない。しかもその出かたがばらばらで、出かたのばらばらさ加減がまたでたらめでなくてはならない。

このくらいでたらしめになると、グウゼンから妙なことが起こる。πの七六二桁目からは九が六つ並んでいる。七一〇一〇〇桁目からは三が七つ並び、二二九三一七四五桁目の先には四が八つそろそろと出てくる（ということとは、二千万個の数字を読んだ人がいるのだ！）。それからなお四百万桁ほど進むと、二二〇九八七六五四三とつながるところがある。そんなに先まで行かなくても、三六〇桁の前後三桁では数字がちょうど三六〇と並んでいる。

コンピューターというのは愚直一方の機械だから、ひたすら頑張れば二億桁を達成できると人は思うかもしれないが、それは間違い。有限の時間内に二億桁も計算するには、優れた理論のシエンが必要だ。今回用いられたモジュラー関数という理論をコンピューターなど影もなかった数十年前に用意しておいたのも、三十三歳で亡くなった天才ラマヌジャンであった。本当にすごいのは人の頭脳なのだ。

（池澤夏樹『エデンを遠く離れて』による）

問一 傍線部A・B・C・Dと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ショカ|ン

- ①全集のカ|ンスウを数える
- ②列のカ|ンカクを空ける
- ③書籍がサイカ|ンされる
- ④カ|ンケツに説明する
- ⑤エイカ|ンを手にする

17

B ヨウ|イ

- ①エンヨウ|航海に出る
- ②祖父のホウヨウ|を営む
- ③ヨウギ|シヤを連行する
- ④スイヨウ|液に浸す
- ⑤ヨウエン|な微笑みを浮かべる

18

C グウ|ゼン

- ①ドグウ|を掘り出す
- ②招待者をユウグウ|する
- ③グウ|イ的な物語を読む
- ④広間のイチグウ|に陣取る
- ⑤神社のグウ|ジと話す

19

D シエ|ン

- ①エンセキ|に乗り上げる
- ②会議をエンカツ|に進める
- ③仲間にセイエ|ンを送る
- ④手首のエンシヨウ|を患う
- ⑤エンチヨク|に垂線を下ろす

20

問一 傍線部(a)・(b)・(c)の意味として最も適當なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 偏在する

① 広くいきわたっている

② あちこちにある

21

③ はっきりしている

④ どこにでもある

⑤ かたよっている

(b) 知らぬが仏

① 腹が立つことでも気付かないふりをする

22

② 本人だけが何も知らずに平静でいる

③ 知っているはずなのに知らないように見せかける

④ 感情に振り回されないよう冷静でいる

⑤ 滑稽なことでも笑わずやり過ごす

(c) 愚直一方

① 臨機応変に対応できる

② 小利口で狡猾である

23

③ しっかりした意思に基づかない

④ 真面目すぎて融通が利かない

⑤ 愚かにも一生懸命である

問三 傍線部（二）「万民」に該当しないものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。

24

25

- ① 凡庸なる教師
- ② 普通の生徒
- ③ 文学を目指す若者
- ④ 一部の天才
- ⑤ 二流の数学者
- ⑥ レイモン・ラディゲ
- ⑦ ニワトリ

問四 傍線部（二）「迷路の中でうろろうしている」とはどのような状態をさしているか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

26

- ① 普通程度の数学の達人が、AはBではないかとまず閃き、その次にその証明を考えるような状態。
- ② きちんと整理して論文にする時間などなかったから、要点だけをメモのように記さざるを得ない状態。
- ③ 理科の方で野心を持つ若者が、天才でない以上は地道な努力で世を渡ってゆくしかないと悟るような状態。
- ④ 悠々と死んでしまったものの、後になってその計算が間違っていることがわかったという滑稽な状態。
- ⑤ 文学を目指す若者が二十歳前後になって、自分はアルチュール・ランボーでもレイモン・ラディゲでもなかったと気付くような状態。



問五 傍線部(三)「延々と晩成の道を目指す」とはどういう意味か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

27

- ① 数学の話と聞いただけで拒否反応をおこす人に説明するのは楽ではないという意味。
- ② 教師や普通の生徒は数学の難問を二十のステップを踏んで証明するという意味。
- ③ 手で計算するほかなかった時代に $\pi$ の値を算出するのは悲劇的であるという意味。
- ④ ちように迷路を上から見るような具合に全体を見透すことができるという意味。
- ⑤ 才能に恵まれない人が地道な努力で世を渡ってゆくしかないのを悟るという意味。

問六

傍線部(四)「太平洋というのは十日の間ずっと飛んでも終わらないほどの大きな海なのだ話しても、ニワトリには何一つわからない」という比喻と同じことを意味しているのは以下のどれか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

28

- ① 今日群論と呼ばれる広大な分野の基礎をきちんと整理して論文にする時間などなかったから、要点だけをメモのように記したということ。
- ② ニワトリの小さな頭では理解できないことを言うオオミズナギドリを、ニワトリたちは理解できないとしていじめてしまうということ。
- ③ 本当の天才は頭の中に湧いてくるアイデアを書いておくだけで精一杯で、証明などはまだるっこしくてやっていられないということ。
- ④ 天才にとって自明のことであるのに、凡庸な教師はその過程を重視し、解が正しいことを証明するよう求めてしまうということ。
- ⑤ 数学の話と聞いただけで拒否反応をおこす人に、天才というのはどのくらいすごいのかを説明するのは楽ではないということ。

問七 傍線部(五)「本当のでたらめというのはむずかしい」と筆者が言う理由は何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

- ①二億個の数字の並びかたは本当にでたらめなのか、というあたりに興味を惹かれるのに、〇から九までの数字が平等に出てこないから。
- ②〇から九までの数字が平等に出てくることを証明するために、二千万個の数字を読むような人がいるから。
- ③〇から九までの数字が平等に出てこなくてはならないのに、 $\pi$ の七六二桁目からは九が六つ並ぶといった妙なことが起こることがあるから。
- ④〇から九までの数字の出かたがばらばらであるならば、七一〇一〇〇桁目からは三が七つ並ぶといった出かたは当然のことであるから。
- ⑤〇から九までの数字が平等に出てくるかどうかともわからないのに、一万ページの電話帳を読むような者がいるかもしれないから。

問八 傍線部(六)「本当にすごいのは人の頭脳なのだ」とあるが、人の頭脳のすごさを示す例として間違っているものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

30

- ①ラマヌジャンの『ノート』には証明がほとんどなく、注釈をつける作業は六十年前に始められて、今、ようやく終わりに近づいている。
- ②有限の時間内に二億桁も計算するには優れた理論が必要だが、コンピューターだからこそモジュラー関数という理論を応用できた。
- ③ガロアが自分の頭の中にある数学思想を必死で書きとめたメモが公刊され、学界がその価値を知ったのは数十年後のことであつた。
- ④コンピューターなど影もなかった数十年前に、モジュラー関数という理論を用意しておいたのは天才ラマヌジャンであつた。
- ⑤ラマヌジャンがイギリスの数学者にあてて自己紹介のために書いた手紙には、自分が発見した定理が百以上も書いてあつた。